

ワシントンの合気道

昭和五十年入学 稲賀 繁美

首都ワシントンはちょうど紅葉ならぬ黄葉が始まる季節を迎えていた。平成十八年十月中旬のこと、北米合州国議会図書館・クルーギー・センターの招きで渡米したところだった。はじめての日曜日の午後、もよりのクリーヴランド・

パークの地下鉄駅とは、コネチカット通りの反対側に位置する国立動物園に散策に出かけた。あたりは都市圏というのに、豊かな林を残した広大な公園をなしており、起伏のある谷間に沿った歩道には、ジョギングに精を出す老若男女が傍らを過ぎ去ってゆく。呼び物のパンダの親子も、ちようどお昼ねからのお目覚めか、姿を現わして訪問客たちの歓声に迎えられていた。陸橋を越えて敷地の南東に位置するアマゾンの鳥類館で極彩色の鳥たちを鑑賞し、さらに谷間を下ってアシカたちが泳ぎまわる野外の池などを巡るうちに夕刻が近づいてくる。山中の峡谷かと訝る散策路をしばらく進むと、巨大な石造りのアーチ型の橋が三本ほど、はるか上空に架かり、峡谷を跨いでいる。これだけでも日本では想像を超えた寸法の、桁外れの景観だ。

谷底には、ロック・クリークという岩間の溪流に沿ってボトマック・パークウェイという幹線が走り、これを東西に垂直に横切って、谷間に下り、また這

い上がるのが、今歩いているカルヴァート街だった。その向こうに谷の傾斜にへばりついている広大な建物は、あとでたしかめてみるとオムニ・シヨレハム・ホテル。ワシントンが大統領就任の夜にサクソフオンを演奏してみせて話題を呼んだのが、ほかならぬこの場所だった。この峡谷を南南東から北北西に跨ぐ巨大な橋が、最初に通ってきたコネチカット通り。それと並行して地下鉄のレッドライン（赤線）が走っているはずだが、こちららは地下深くを貫いていて、地上からは痕跡も見えない。一見自然の景観をそのままに残したような風情ながら、実際には巨大な投資によって、首都と隣のメリーランド州とを繋ぐ動脈が隠されていたことになる。これと比べると、聖橋の景観を台無しにするように幹線が行き交うお茶の水の手狭な風景は、いかにも日本的資本主義の縮図というほかになく、懐かしも情けない。

谷間にあつたカルヴァート街を地上の高さまで戻ると、目の先にはウッドリ・パーク・ブーの地下鉄駅。ちようど代々木のオリンピック・センターから千代田線の代々木上原駅に出た感覚だが、こうした比較をすると、ふたたび、敗戦後日本の公共投資の底の浅さと貧弱さを痛感させられる。コネチカット街の開発は一九二〇年代から三〇年代にかけてのことで、ニュー・デイル政策による大恐慌対策の一環と見られる要素も多分に存在する。前後する時期の日本の公共事業で、これに匹敵する目玉といえ、明治神宮外苑など質素なもので、さしずめ満洲における大連や新京の大規模都市開発に指を屈するほかなからう。

そんな感想を抱きながら、コネチカット通を北に歩む。帰宅するには森に囲まれた閑静な住宅地を、道に沿って一駅ほど歩けばよい見当だ。地下鉄駅周辺にはレストランや商店が軒を連ねているが、ふと見ると、レバノン料理店の横に合気道の看板がでている。植芝盛央・現道主の演武の写真から、本部・合気会系の道場と知れた。稽古時間を知らせるフライヤーがきちんと束ねてある。

これを持ち帰り、試しに電子メールを送ったところ、すぐにも返答が帰ってきた。次の週からさっそく稽古に参加した。幸運なことに、ワシントンでの寓居から歩いて十分もかからぬ場所に、格好の道場が存在していたわけである。

*

道場を主催するミッシェル・ペルトリさんは当年三十九歳。海兵隊に属していたおり、南カリフォルニアで合気道に開眼したという。その後沖繩に駐留したおり、沖繩合気会の山口師範に師事し、退役後には二年ほど内弟子として修行を積んだ。日本での経歴は十年に達し、現在四段。身長は百八十センチ近いが、決して筋骨隆々ではなく、むしろ肥満過多の北米では珍しいほどの均整体。ただお相模さんなみに前屈で体が畳にびたりとついてしまうのは、当地では珍しい。オハイオ州立大学といえは日本語教育でも有名だが、そこで学位を取得しており、日本語も堪能かつ正確。外国研修のプログラムにより一年間をICUで過ごしている。電子メールでのやり取りからも、几帳面でまめな性格は明らかだったが、受講中の説明なども、かなりインテリの英語で、普通の会話ではあまり登場しない高級な言葉がごく普通に使われて嫌味がないのも、お人柄だろうか。人当たり良い礼儀正しさなど、「日本人にも珍しい」というのは、この筋の関係者には珍しくないが、無作法な当方など恥じ入る次第。山口師範もワシントンに訪れたことがあり、当地の受講者たちの真剣・純粋なさまには感銘を受けた旨、「琉球新報」のインタヴュー記事に答えておられた。

ヴェルトリさんは、数年前まではセールスマン稼業のかたわら、近くの別の場所で夜間の講座を開設していた。それが二年ほど前から現在のコネチカット通二六三九番地の半地下の道場に移った。以前はガレージの一角で、広い場所ではあったが、借り会場だったため、稽古のために畳の上げ下げがあり、それはそれで良い稽古にはなったが、とにかく畳の傷みが激しかったそう。現在の場所は百畳近くもあるだろうか。かつてはカンフーの道場だったとのことだ

が、東側からの採光のため道場は明るく、床にも畳が動かぬように周囲に材木を刻んで埋めてあり、木剣や杖を含めて、管理も徹底している。当方は都合で週末の稽古に参加するのみだが、このかなり広い道場が手狭に感じられるほどの受講生が集う。そして毎日の稽古が終わると、黒帯が率先して、道場全体の拭き掃除に携わる。

実はヴェルトリさんは、二〇〇三年四月に、睾丸の癌の診断を受け、手術のち、化学療法を十一月まで実施して生還した経験をもつ。病とのつきあいも「入り身」の極意、と語るが、このあたりで心境にも何がしかの変化があったよう。先日、退院後まもなくの昇級審査指導のビデオ映像を拝見する機会を得たが、病後の体力の不足をいかに克服するかを模索した結果、技にもさらに深みが増したのは、疑いなくように窺えた。現在は丸坊主のいでたち。あるいは抗癌剤の副作用だったのかもしれないが、病後、鏡をみて、もう頭髮はいらないや、との判断に達したとのこと。以前より精悍になり、良い意味で禪坊主のような風格も漂ってきた。昨年夏、東京の本部道場ほか日本各地を道場生とともに訪問して稽古に励んだという。沖繩の暑さには、道場生たちは驚愕したようだ。帰国後、合気道一本で生計を立てるため、昼間にも講座を増設し、「黙想」のクラスも開設し始めた。高級住宅地間近の立地ゆえ、道場の貸借賃も月三千ドルと、高い負担を強いられている。

ひとりで道場を維持するには、正直、大変な努力が欠かせない。いまのところ、受講希望者の受け入れから、道場の管理、技の指導、講習料の管理、会場の貸借契約まで、すべてをヴェルトリさんひとりで切り盛りしている。近い将来、道場の運営に関しては、次なる方策を採る必要が生まれてくることも確かだろう。道場の設備一般については、イタリア出身のマッシモさんという巨漢が、商売柄の専門家で、棚の付け替え、天井から送風機を吊るす設置、稽古で穴のあいた壁の補修など、親身になって道場主を支えている。余談だが、月

一度の黒帯研修会で、マッシモさんと腰投げを三十分やったのには、少々参った。いかに力を使わないといつても、身長や体重にこれだけ差があると、技にならない。

*

という次第で、ようやく稽古の中身にたどり着いた。日本遠征での休止期間を越えて、新たな受講者も多い秋の新学期の季節だから、稽古の組み立てにも試行錯誤が必要となる。だがヴェルトリさんは、そのあたりはもうすっかり慣れている。基本的には体術も杖も剣術も本部道場の流儀を忠実に守っている。

日本語に堪能なヴェルトリさんらしく、日本語の技の名称、その語義などの指導も徹底している。「入り身」と「転換」の違いが「表」と「裏」の違いに重ねあわせに歪曲されて、「入り身」即ち「表」、「転換」即ち「裏」といった誤解を招いている場合が、北米ではままあるそうだが、このあたりは語義をきちんと説明して解きほぐす。特徴といえ、足技の蹴りに対処する稽古が、有段者や経験者相手には多く取り入れられていたことだ。これは空手が盛んな沖縄でもともと空手出身だった山口師範に師事したことの影響だろうか。海兵隊時代に沖縄で山口師範ともども野外演武を催した折のヴィデオも拝見したが、そこでも空手の前蹴りへの捌きが多くみられた。

こうして外国で稽古をするたびに、いままで気づかなかったことが見えてくる。改めて納得したのは、東大合気道部の技に、国井先生直伝の鹿島神流の流れを汲む体術が脈々と受け継がれている事実だった。現在の合気会にはみられぬ体捌きも少なくない。道場古参の黒帯のローランなど、さっそくこの違いに気づいた。そして違う場所でも稽古してきた人から新たな教えを吸収したい、といって、稽古をつけてくれるよう求めてくる。まず、入り身における上体の捻りは、初心者では腕力任せの水平円運動となりがちだが、当方の動きは肩と腰を繋ぐ斜めの楕円となっている。いわゆる井桁崩しの初歩形態という程度だ

が、これも袈裟切りが体に染み付いているためだろう。一方、ほぼ同じ背丈の相手でも、白人の腕力には到底かなわないことも再確認させられた。その反面、持久力に欠け関節技には弱いのが、白人一般の傾向だが、受講生のなかには指を反り返らして反対の腕の甲に指先がつくという、愛称「軟体動物君」がいて、彼にはいかなる関節技も無効だった。およそ二倍近い腕力の持ち主が、力を抜くコツを身に着けると、これに対処するのは不可能に近い。だが、アジア系以外の人々は、意外に下半身が脆い。膝の故障も発生しやすいので、かれらの稽古を指導するには、注意を要する。壊れた膝は容易に完治しないのだから。

問題を簡単に整理しよう。以前にも記したことだが、アジア人の常識で白人の腕のリーチを推測すると、モロにパンチを食らう。また黒人の若者の跳躍力は、これもアジア人種の常識を超えているので要注意、というのは一般的な観察だろう。そのうえで合気道の稽古に來ている人たちは、力と速度で勝敗が決まるような世の中の価値観からの脱却を目指している場合が多い。こうした欲求に答えられるだけの技を見せられなければ、彼らを引き止めることはできない。北米の移民社会では、相手の動きを事前に察知して衝突を回避する、といった作法は、行動規範として成立していない。Bystander という表現は、まるで、いまからぶつかるから注意しろ、と警告するに等しい言葉だ。先を読む、気配を察するなどという、日本では当たり前とも思える配慮が、心身技法としても、未開発のままになっている。運動競技でも、審判の号令への服従という、機械的な規則に縛られている。唯一の例外が、ほとんど映画の世界だけの虚構だが、拳銃による一対一の決闘だろうか。

ここで大切な、機先を察する身のコナシは、むろん意識してできるものではなく、意識すれば却って遅れを取る。まして当方など「運動神経」皆無、動物的直感も欠如した「ニブカン」代表だ。それでも、相手が「発する」瞬前に気を発し、相手の先を逸らしつつ「続飯」する捌きだけは、これも鹿島の剣術か

ら、劣等生なりに、幾らかは体得していたようだ。こうした訓練は、今日の道場稽古では、なかなか容易には伝達できない。改めて東大合気道部の稽古の水準が実感され、稲葉稔先生の的を得た叱正の貴重さが身に沁みた。

力を力で粉砕する、あるいは力づくで封じ込めるのが、良くも悪しくも北米流といえようか。それゆえ逆に、相手に不快感を与えることなくイナシ、事態を穏やかに制御する技術が大切になる。そうした体捌きは、日常の処方として生かしてこそ意味がある。決断すべきところで問題を斬り、しかし必要とされるしなやかさを失わない身のこなし、心のゆとり。それも、五十歳に達した自覚とともに、これから先許される稽古の賜物として養って生きたいものだ。だが、それを許容する心身を維持するには、かなりの自制と強度のある持続的な訓練が不可欠だろう。呼吸力とは、ひとつには、そうした潜勢を保持する能力のことを指すのだろう。身体的にも精神的にも、先に息の切れたほうが負けである。とともに、いまひとつ今回の稽古でなると腑に落ちたのは、いざとなれば武器に執着しない、という鹿島の剣の教えだった。武器を制御しようとする気持ちに囚われると、その執着が却って盲点を作り、隙を生む。逆に、剣を叩き落された瞬間に、入り身が生き、当身の理が通る。これは、人生において遭遇する様々な試練への教訓としても、具体的に生かされるべき教えだろう。脅威を抑止しようとする駆け引きには、致命的限界が内在する。

ヴェルトリさんの道場の説明文には、次のような一節がみえる。Aikido training not only incorporates physical conditioning, but also places great emphasis on the development of positive human qualities: compassion, courage, endurance, and inner strength. In this spirit, Aikido training is undertaken with the goal of improving the individual and thereby society as a whole. 武道「うとう」とかく martial arts と訳される。だが「武」という漢字がセ(ホ)を止めるといふ意味であったことを思い出すのは、無意味ではな

い。北米での説明には不可欠でさえある。サイボーグ・スーツよろしく甲殻類のような外皮を纏うのではなく、内部の充実によって個人を高め社会に益するという理念。稽古を通じてこれを体得・実践する覚悟が、この平易な英文からも十分に伝わってくる。

*

十二月には昇級審査が催された。全員の審査が終わった後に披露された模範演武が「見もの」だった。ヴェルトリ先生みずから、審査受験者ひとりひとりを相手にして、休みをいれず十五分に及ぶ稽古を付ける。七級、六級あたりの初心者、難しい投げ技にも見事な受けを取る対応ぶりには感銘を受けた。また技の指導では、初心者用にやや単純化され、分解された説明を加える折節もあるヴェルトリさんだが、みずからの演武となると、下半身と上体とが見事に釣り合って、無駄のない動きが生まれてくる。座り技での膝の使い方には、折りたたまれた下肢の長さを自在に使い分ける技量が遺憾なく示された。とりわけ杖は、体術との関係や意味合いを示すための見本演武だが、まだ級段階の受講者を相手に、事前の打ち合わせもないままに次々に技を提示して間然とするところがなく、普段の稽古における精進のほどが窺えた。みずからが率先して模範を示さなければ受講生はついてこない。そのことをきわめて自覚的にわきまえた指導であり、審査の後の講評にも、受講生たちの成長を、ひとりひとりきちんと見極めた的確な評価があつて、すがすがしかった。

昇給審査が終わると、日本で言えば師走も押し詰まり、普通ならクリスマス会の宴会だが、ヴェルトリさん命名の「忘年会」が、十二月十七日に自宅で開催される。午後三時からだが、遅れてもかまわないという。夕刻五時過ぎに、国立大聖堂(ナショナル・カシドラル：最近フォード元大統領の国葬が営まれた場所だ)からさらに西に一本入った、一個建てる住宅街のお宅にお邪魔した。家のなかには、既に五十名を優に超える受講生やその家族たちの熱気でこつた返し

ていた。食事はケイタリングに頼んでのビュッフェ形式。日本でもっと気軽にこんな形式の宴会があればよいのに、と思う。その昔、田中師範のお宅に「大掃除」でお邪魔したものだ。薄々推測はしていたのだが、酒類は一切でない。何人かが持参した葡萄酒は、暖炉の棚のうえにむなしく鎮座していた。集った一同のなかには、受講日が違うため、昇級審査の日にお手合わせしただけの黒帯、ロシア出身の生理学者、セルゲイさんも居て、奥方と、生まれて三ヶ月の赤ん坊を紹介してもらう。ふと見渡すと、生粋の米国人というのは、かえって少数派といってもよく、世界各国からいろいろな縁で米国の首都にやってきた、言葉も肌の色も様々な人々が、この場集って談笑している。

そうこうするうちに、いまや古参の誰彼が数年前に初心者だった頃の昇級審査の映像が披露されて、皆の爆笑を誘う。黒人女性有段者のヒルダは、毎日欠かさず稽古に来て「道場をワシントン中のどの病院よりも清潔に管理している」しつかり者。「ここまでやるのは insane だ」などとマッシモに冷やかされているが、その彼女など、昔の太った自分の姿に、思わず笑い転げている。また昇給審査で感心したヴェルトリさんの杖術は、山口師範のビデオを徹底的に研究して体得したものだ。納得された。無意識の欠点を是正するにも、自分のビデオ映像を批判的に吟味するのは、大切な訓練だ、とヴェルトリさんは語る。ビデオなどない時代に稽古を始めた人間としては、さぞや自分の演武などには、見苦しい欠点が山積していたことだろうな、と冷や汗混じりに拝聴することになる。

さて、当方も当年とって五十歳。おそらく道場で一番年上だろうと嵩をくくっていたのだが、違っていた。ローリーさんという長身の黒人男性は、厳つい顔に似合わずいたって情に厚い古参のひとりだが、俺は五十八だよ、という。そんなこと、いままで尋ねてもみなかったヴェルトリさんも、これにはびっくりだったが、そのローリーは、翌週小さな可愛い男の子を道場に連れてきた。

稽古のあと、その子に教え始めたのだが、グランバがやるのをよく見てご覧などといつて、十分ほどのうちに受身を仕込んでしまった。なんだ、お前はもう「おじいちゃん」なのか、そんなに若々しいのに、とても信じられない、などと皆で騒いで嘲したてる。これでは当方も、とても年寄り面などできなくなってしまう。

大晦日には午後十一時に道場に集まり、午前を回るまで稽古をし、ついで新年を祝う会を催した。残念ながらこちらには都合があつて参加できなかったのだが、日本食まで準備したのだという。そして新年早々の一月八日には、我がヴェルトリ先生は、東京の本部道場での鏡開き出席のため、一週間の出張。今年の十一月に再度山口師範をワシントンにお呼びするための打合せもあるのだという。当方がワシントンに滞在できるのも、残るはあと半年ほどとなった。

その許された期間に、できる限りの精進を尽くしたいと思っている。

最後に、蛇足、ではないのですが、ヴェルトリさん、どうやらいまだ独身生活の様子。どなたかふさわしい連れ合いがみつからないものだろうか。なにしろ明けても暮れても合気道三昧の生活だから、それをよく支えてくれるだけの内助の功が不可欠なのだ。

(ワシントンにて西暦二〇〇七年一月八日)

Okinawa Aikikai U.S. Dojos 2639 Connecticut Ave NW, Washington,
DC 20008

問い合わせ先は

Tel.(202) 338-8690 WWW.DCAIKIDO.COM